

日本発達心理学会 2025 年度国際ワークショップ・公開講演会 報告
国際ワークショップ：「ヘルシーエイジング：学際的研究分野と実践（Healthy Aging : Research Fields and Applications）」
公開講演会：「ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチ：主要な課題と挑戦（A Life-Course Approach to Healthy Aging : Key Issues & Challenges）」

日本発達心理学会国際研究交流委員会

The International Research Committee of the Japan Society of
Developmental Psychology (JSDP)

日本発達心理学会国際研究交流委員会委員長 岡田 涼（香川大学）
特別委員 近藤 龍彰（富山大学）

日本発達心理学会では毎年、海外の著名な研究者を講師として招聘し、国際ワークショップおよび公開講演会を開催してきました。2025 年度は、梨花女子大学異世代統合研究所（Ewha Institute for Age Integration Research : EIAIR）の所長、スンドウル・チョン（Soondool Chung）教授を講師としてお招きしました。国際ワークショップでは「ヘルシーエイジング：学際的研究分野と実践」をテーマに、2025 年 9 月 13 日（土）～14 日（日）の 2 日間、神戸大学大学院人間発達環境学研究科でレクチャーとディスカッションを交えたワークショップを行いました。14 日（日）の午後には、「ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチ：主要な課題と挑戦」をテーマに、公開講演会を開催いたしました。

この国際ワークショップ・公開講演会は、臨床心理士、学校心理士の資格更新ポイント付与対象の研修会として認定されました（国際ワークショップ：臨床心理士 2 ポイント、学校心理士 1 ポイント；公開講演会：臨床心理士 2 ポイント、学校心理士 1 ポイント）。

なお、今年度においても、国際ワークショップ・公開講演会は、様々な団体との共催によって実現したものです。公益財団法人発達科学研究教育センター（CODER）には共催機関としての助成金支援を賜りました。また、神戸大学ウェルビーイング先端研究センターも共催機関として補助を賜りました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。また、講師のチョン先生をはじめ、ホストを務めてくださった神戸大学ウェルビーイング先端研究センターの片桐恵子先生、公開講演会で通訳を務めていただいた鳥山理恵先生、アルバイトスタッフとしてサポートしていただいた神戸大学の大学院生、学生の皆様、その他お力添えを賜りました関係各位に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

2025 年度国際ワークショップ・公開講演会講師受け入れ担当委員
片桐 恵子（神戸大学ウェルビーイング先端研究センター）

2025 年度の国際ワークショップと公開講演会は、ヘルシーエイジングをテーマとしました。日本の発達心理学分野においてはまだまだ研究があまり発展していない「老年期」ではありますが、「超高齢化社会」となっている日本の現状を鑑みると、非常に重要な研究テーマと言えます。チョン先生をお招きし、ヘルシーエイジングの理論的、研究的、応用的知見について、深く学ぶ機会を持ちました。これを機に、国内においてヘルシーエイジングに関する研究が隆盛することを期待します。

講師紹介

Soondool Chung（スンドゥル・チョン）博士は、社会福祉学を専門とされており、韓国老年学会長も務められております。近年は高齢者の well-being に関連した研究を主たるテーマとして、精力的に研究を進めておられます。高齢者は、かつては介護や医療の対象であるとして社会的弱者として扱われてきた側面もあります。しかし、欧米では 1980 年代頃から、アジアでは 21 世紀に入った頃から、高齢期を生涯発達の一つの段階として捉え、ライフコースの視点を持った研究も盛んに行われるようになってきています。チョン教授はそのような高齢期の well-being の実現を図るための要因について、ライフコースの視点から検討を重ねておられます。

そもそも老年学は学際的な分野と言えます。高齢者自身の要因と社会的な要因の両方の視点から解決すべき社会課題を特定し、心理学や社会学、社会福祉学から情報工学、医学、看護学など様々な学問領域から共同して研究が行われています。

高齢期に対する適応という観点からは、近年 WHO が提唱したヘルシーエイジングという考え方が主流となっています。これは、身体的、精神的および社会的な機能を保ちながら自律した生活を送ることを意味します。このような考え方は、高齢者のみに当てはまるものではなく、生涯発達のすべての段階で実現されるべきことです。

日本発達心理学会もまた、多様なライフコースにある多様な人々の心理発達を研究する、学際的な場です。しかし、高齢期にある人々の発達に関しては、相対的にまだ研究が十分に進んでいない現状があるように思います。今回、チョン教授に高齢期についての講演をいただくことで、高齢期の発達心理の重要性を確認するとともに、ヘルシーエイジング、ライフコースの視点など、すべての年齢の人にとっても取り組むべき課題であることを理解し、共有したいと考えました。このような経緯から、今回の国際 WS と公開講演会に際して、チョン教授に講師をお願いすることにしました。

なお、一部ではありますが、チョン教授の主な業績を以下に記載しております。

Chung, S., & Kim, M. (2023). Age-friendly environment, social support, sense of community, and loneliness among middle-aged and older adults in Korea. *Aging & Mental Health*, 27 (7), 1352-1359.

Chung, S., & Namkung, E. H. (2022). Self-esteem as a mediator in the relationship between perceived age stigma and emotional well-being among Korean older adults: the moderation effect of marital status. *Aging & Mental Health*, 26 (7), 1470-1478.

Chung, S. & Kim, J. (2021). The effects of intergenerational program on solidarity and perception to other generations in Korea, *Journal of Social Service Research*, 47 (2), 219-231.

国際ワークショップと公開講演会の概略

以下に、国際ワークショップと公開講演会について概略をご報告します。なお、表記上の留意点として、大きなセッションを“”で、セッションにおける小トピックを「」で表記し、それぞれに英語タイトルを付記しました。

「ヘルシーエイジング：学際的研究分野と実践（Healthy Aging : Research Fields and Applications）」

開催日：2025 年 9 月 13 日（土）10:00 ～ 17:30, 14 日（日）10:00 ～ 12:30

講師：スンドウル・チョン（Soondool Chung）（梨花女子大学）

司会者：片桐 恵子（神戸大学ウェルビーイング先端研究センター）

【国際ワークショップの概要】

国際ワークショップは、2025 年 9 月 13 日（土）午前・午後および 14 日（日）午前の計 1 日半、神戸大学大学院人間発達環境学研究科大会議室で開催されました。講師のチョン先生を囲んだ参加者は 13 名（国際研究交流委員会の委員とアルバイトスタッフを含む）でした。

ワークショップ 1 日目の午前は、講師と参加者全員の自己紹介から開始し、セッション 1“老年期の人々についての概略（Overview of Older People）”の説明から始まりました。そもそも「高齢者とは誰なのか（Who is an Older Person ?）」を問い、elderly や seniors という用語を用いることがエイジズムの観点から適切ではないという視点や、4 つの種類の年齢（生活年齢、生物的年齢、心理的年齢、社会的年齢）について解説がなされ、エイジング研究において研究対象となる「高齢者」について多角的に定義・測定していくことの重要性が指摘されました。また、「高齢者についてのイメージ（Images of an Older People）」について、一般的な高齢者のイメージを確認したのち、老年期に関する「人口動態的な傾向と問題（Demographic Trends & Issues）」について、高齢者人口や経済状態、孤独、健康状態、寿命など、多角的な視点から日本と韓国のデータを参照した解説がなされました。

午後はセッション 2“エイジング研究のデザイン（Research Design for Aging and Older Populations）”から始まりました。老年期を研究するための「研究デザインのタイプ（Research Design : Types）」について、縦断的アプローチと横断的アプローチ、量的アプローチと質的アプローチ、混合デザイン等の方法論を学びました。また、「研究デザインの課題（Research Design : Issues）」として、

研究者や研究対象となる老年期の人々自身の役割（共同研究者となり得ること）や、老年期の人々の多様性について解説がなされました。「研究における問い（Research Question）」では、リサーチトピックや方向性を自由に描くこと（freewriting）や、研究上の問いのいくつかのサンプルを提示していたとき、エイジング研究のイメージを広げることができました。

続いて、「エイジング研究における時間（Time in Aging Research）」をテーマに、エイジング研究における3つの時間効果、年齢効果（age effects）、時期効果（period effects）、世代効果（cohort effects）について解説されました。その弁別のためには、データ収集や統計的方法、仮定の設定など、いくつかの点での工夫が求められます。老年期に限らず、発達に関する研究では、この3つの効果が弁別されないままに研究が行われていることがあり、その弁別の必要性和その難しさについて理解を深めました。「エイジング研究の場（Place in Aging Research）」として、研究を実施する場について、コミュニティで暮らす自立して暮らす高齢者なのか、ケアが必要な施設での研究なのかにより、研究テーマが異なりうること、また介護に関しては個人情報であるため、十分プライバシーに配慮する必要があること、また状態がよくない高齢者の場合は、家族や介護者に対して調査を行う場合があることなどが指摘されました。

エイジング研究における「サンプリング（Sampling）」の課題（例、健康である人が研究対象となりやすい、もっとも高齢の人が研究から除外されやすい）や、よいサンプリングの原則について語られ、研究対象者のサンプルとしての代表性を担保することの難しさについて考える機会になりました。

また、引き続いて、セッション3“リサーチ方法：ヘルシーエイジングの概念と測定（Research Methods：Concepts and Measures of Healthy Aging）”を実施しました。「ヘルシーエイジングの概念（Health Aging：Concept）」について、WHO等の健康概念を改めて確認しました。また、幸福（wellness）を考えるうえでのいくつかの「ヘルシーエイジングの領域（Healthy Aging：Domains）」について解説されました。1日目の最後に、架空のシナリオをもとに、参加者がエイジングを捉える適切な研究デザインを考えるグループワークを行いました。

ワークショップの2日目は、前日のグループワークの振り返りから始まり、各グループで検討した研究デザインを発表し、議論を行いました。その後、セッション3の続きとして、「ヘルシーエイジングの測定（Healthy Aging：Measures）」のためのいくつかの指標について解説されました。

次に、セッション4“ヘルシーエイジング研究のデータセット（Data Set for Health aging Research）”が紹介されました。ヘルシーエイジング関連のデータについて、「韓国（Korean Longitudinal Study of Aging：KLoSA）」、「日本（Japanese Study of Aging and Retirement：JSTAR）」、「アメリカ（Health and Retirement Survey：HRS）」、「イギリス（English Longitudinal Study of Aging：ELSA）」、「ヨーロッパ（Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe：SHARE）」、「中国（China Health and Retirement Longitudinal Study：CHARLS）」のデータの概要やデータを用いた研究が紹介されました。

最後に、セッション5“ヘルシーエイジング研究の領域（Field of Healthy Aging Research）”では、

ヘルシーエイジングを促進するための「活動分野 (Healthy Aging : Action Areas)」や「実践例 (Healthy Aging : Action Examples)」, 「老年学研究における倫理 (Ethics in Gerontology Research)」について紹介されました。海外における実践例だけでなく、日本における実践例も紹介していただき、ヘルシーエイジング分野における研究と実践のつながりを感じることができました。

参加者の多くがあまり触れたことのない老年期、エイジング研究でした。しかしながら、研究をデザインするための理論的背景や具体的な尺度、データセット等を数多く紹介していただき、この領域の多様性と発展可能性を学ぶことができました。参加者にとって、ヘルシーエイジングに関する研究の魅力や可能性に触れることができた有意義な 2 日間でした。

公開講演会：

「ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチ：主要な課題と挑戦」

講演日：2025 年 9 月 14 日（日）14:00 ～ 17:15

講演者：スンドウル・チョン (Soondool Chung) (梨花女子大学)

司会者：岡田 涼 (香川大学)

通訳者：鳥山 理恵

【公開講演会の概要】

公開講演会は、2025 年 9 月 14 日（日）午後神戸大学大学院人間発達環境学研究科大会議室で開催されました。参加者は 42 名であり、全国各地の研究者だけでなく、開催地である神戸大学近隣の地域の方々にもご参加いただきました。

最初に岡田国際研究交流委員会委員長からの開会挨拶と受け入れ研究者である片桐教授による講師紹介があり、その後にスンドウル・チョン先生から、ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチについてご講演いただきました。

まず初めに、パート 1 “ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチの概念的基盤 (Conceptual Foundations of the Life-Course Approach to Healthy Aging)” について、ご講演いただきました。「①ヘルシーエイジング (Healthy Aging)」において、平均寿命と健康寿命のギャップ、ヘルシーエイジング、アクティブエイジング、サクセスフルエイジングの違いと関連性、ヘルシーエイジングにおける重要な要素である内在的能力、機能的能力、環境、ヘルシーエイジングの鍵となる機能的能力、について説明されました。

「②ライフコース・アプローチとは何か (What is the Life Course Approach)」において、ライフスパン、ライフサイクル、ライフコースの概念的違い、ライフコース・アプローチの定義、エイジングにおける伝統的な見方とライフコース・アプローチの視点の比較、について解説されました。

「③ライフコース・アプローチのモデル (Models of Life Course Approach)」では、エルダー (Elder) のライフコースモデルの解説があり、具体例 (1950 年生まれの韓国人男性) を挙げて説明がありま

した。

「④ライフコースにおける発達段階 (Developmental Stages across Life Course)」では、エリクソン (Erikson) やハヴィガースト (Havighurst) のモデルを紹介された後、新たに導入された概念 (例、成人形成期やライフコースの制度化、脱標準化) の紹介と、老年期のライフサイクルが細分化 (例、60 歳～、65 歳～、75 歳～、85 歳～の区分、人生のアンコール段階) されているというトレンドが紹介されました。

「⑤ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチ (Life Course Approach to Healthy Aging)」では、健康がライフステージによってどのように形作られるのか、ヘルシーエイジングにおけるライフコース・アプローチの重要なポイントはどこにあるのか (例、実年齢が能力を決めるわけではない、「退職」概念を見直す必要がある、世代同士を対立させてはいけない)、ライフコース健康発達モデル (LCHD) とは何か、について説明されました。

「⑥ヘルシーエイジングの主要な要因 (Key Determinants of Healthy Aging)」では、ヘルシーエイジングにおける個人的・社会的・環境的・社会経済的要因とそれらの交互作用について説明されました。

次に、パート 2“ ライフサイクルと年齢構造の変化 (Changes of Life Cycle & Age Structure : Redefining Life Stages: Shifting Age Boundaries Across the Life Course)”について、お話いただきました。「①ライフサイクルの変化：韓国 (Changes of Life Cycle : Korea)」では、韓国におけるライフサイクル・ライフコースに関連した実態データ (例、最初に仕事に就いた年齢や初婚年齢、実質退職年齢の上昇) を紹介していただき、認識されるライフステージと制度上の区切りのズレについてお話いただきました。

「②国際比較 (International Comparison)」では、平均初婚年齢や第 1 子出産平均年齢、退職年齢、平均寿命の国際比較データをご紹介いただきました。

「③年齢の統合 (Age Integration)」では、社会制度とライフコースのリズムがずれている (構造的遅れがある) こと、これらの解決のために年齢を統合したモデル (各年齢時期に教育、労働、余暇といったそれぞれ固有の活動を割り当てるのではなく、すべての年齢において様々な活動が同時並行的に進んでいると捉えるモデル) を構築すること、年齢の統合モデルとヘルシーエイジングを結び付けること、が述べられました。

次に、パート 3“ 公衆衛生学と心理学におけるライフコース・アプローチの応用 (Applying the Life-Course Approach in Public Health and Psychology)”についてお話いただきました。「①ライフコース介入の枠組み (Life Course Intervention Framework)」では、WHO のライフコースの枠組みや介入例について紹介されました。

「②ライフコースにおける介入 (Intervention across the Life Course)」では、妊娠前や親になる時点、乳幼児期、児童期および青年期、労働年齢、高齢期における介入例について紹介されました。また、健やかなエイジングとして、就労機会・認知症・うつ病・転倒・孤独と社会的孤立への介入について解説されました。

「③健康格差への取り組み (Tackling Health Inequality)」では、健康格差や社会的格差の実態、およびそれを解消するための取り組みについて解説されました。

「④ヘルシーエイジングのための政策の検討 (Policy Considerations for Healthy Aging)」では、ヘルシーエイジングを促すための政策のポイント (例、早期に行動を起こす、自分のライフスタイルを見直す、高齢者に優しい＝あらゆる年齢層の人々に優しい環境を作る) について解説いただきました。

最後に、パート 4 “挑戦と今後の展望 (Challenges and Future Directions)” についてお話いただきました。「①ヘルシーエイジングへのライフコース・アプローチの挑戦 (The Challenges of Life Course Approach to Healthy Aging)」では、ライフコース・アプローチによるヘルシーエイジングの実現の重要性を強調したミンスク宣言について紹介した後、政策の部門間連携のポイントを解説いただきました。

【質疑応答】

(質問者)

日本発達心理学会では、障害を持った方々への発達支援を行っている実践者の方が多くおられます。その中でも発達障害のような、発達早期に障害を持った人たちへの支援を行っている人もいます。資料の中には、高齢者になると障害を抱えるリスクが高まるという記述もありましたが、これらの人々はそもそも障害を抱えたライフコースであると言えます。このような障害を抱えた人々の高齢期、エイジングを考える場合、今回ご講演いただいたようなライフコース・アプローチで統一的に捉えられるのでしょうか。それとも、障害を抱えた人のエイジングに特化した理論があるのでしょうか。

(回答)

興味深い質問です。いわゆる健常の人が高齢者となって障害を抱えるようになったパターンと、もとも障害を持った人が高齢になるという 2 つのパターンがあると思います。それぞれのパターンに対応した政策的アプローチはありますが、それらが統合されたものとはなっていないように思います。現代的に重要な課題だと思われるので、これから考えていきたいと思います。

【受け入れ担当者 (片桐先生) のコメント】

健康な高齢期を過ごすための行動を高齢者になってから始めても遅すぎると思われがちですが、ライフコース・アプローチの視点に立てば、今の状態はこれまでの生活の履歴であり、今の行動を変えれば、それは未来の「健康」につながります。現在、細胞レベルで身体の年齢を測定する技術が確立しつつあり、今なにかをすれば必ず生物学的な年齢は若返ります。今回の講演においても、健康であるための示唆が多く述べられていましたが、それは「こうすれば健康になる」というこれまでの研究知見が確かに蓄積されていることを意味しています。今回の講演会が、参加者の皆様お一人おひとりが健康的なエイジングについて考えるきっかけになればと思います。